

阿香 あしやん

秋野 成道

東晋の永和二年というから、西暦でいうと四世紀の中頃のことである。義興郡、現在の江蘇省溧陽りょうに周という役人がいた。勅令を奉じて無錫まで使いに出かけたことになった。供の者二人を従えて、馬に乗って出かけたのは春の麗らかな日であった。

路程は順調に進んだ。しかし、長江まで来ると数日前の雨で水嵩が増し流れも速い。そのせいで、渡し舟の船頭たちは舟を出すのを嫌がった。川端を上下して、やっと渡つてもよいという船頭を見つけた。これに十刻を要してしまった。そのため、今夜の宿と決めていた太湖までは、とてもたどり着けそうになかった。

すでに日も暮れかけていた。三人は心細さを顔には出さず前を見つめて歩いた。

一つの丘を越えると、道が二条すに別れていた。太湖は西の方向だが、もうどちらが西でどちらが東であるかは分からない。

「さあて、どちらに行くか」

周がそう言うとい供の一人が、

「左の道の方が広そうでございます」

と言うので、それに従うことにした。

あたりが暗くなるにつれて、山と空の境目もだんだんと曖昧になってきた。そのうち両側の林さえも判別できない、一面に墨を流したような暗闇になった。こんな処には、都には居られぬ罪人が隠れ住んでいるかも知れない。またどんな獣が出るかもしれない。道端の枝に触れる音も、賊が近づいてきたのかとびくりとさせられた。時々鳴く野鳥の鳴き声も、獣かと驚かさされた。恐ろしくて誰も口をきくことができなかつた。兎に角早くこんな処を抜け出したかった。しかし気は焦るものの、暗闇に用心してゆつくりとしか前に進めなかつた。

先の道も定かに見えぬ、真つ暗な谷を越えた時である。供の一人が、

「彼方に灯りが見えます」

と言う。目を凝らすと、この先の峠に家の灯りのよ

うなものが見えた。近づくにつれ、確かに家の灯りであつた。

「助かつた。一夜の宿りをお願いしましょう」

周はそう言つて、供の者を励まして歩みを速めた。

これまで恐ろしかった暗闇も、気が勇んだせい少し明るくなったようにさえ思えた。周は馬の脚を速めた。供の者も遅れぬように走つた。

一丁ほど行くと、一軒の真新しい草ぶきの家があつた。

周は馬から降り、供を待たせて戸口に立つた。

「夜分ごめんどされ。我ら義興郡の役人でございますが、宿まではだいぶの距離があるため、ご迷惑とは存ずるが、一夜の宿りをお恵みくださる訳にはまりませぬか」  
そうたずねると、なにか家事をしていた女がこちらを振り向いた。歳のころ十六、七の鄙にはめずらしい、上品な顔立ちの色白な娘であつた。しかも着ている胡服も、派手ではないがどこか垢ぬけているのである。  
「それはお困りでございませう。今からではどうして臨賀までお越しになれませう。このようなわび住まいでございますが、お気兼ねなくお休みくださいませ」

「それはありがたい。闇夜で難渋しておりました。と

ころでこちらにはお一人か」

「いいえ、弟と一緒にございませう。今使いに行つておりますが、おつつけ戻りませう」

「さようか。ではお言葉に甘えて御厄介になります」

娘は周のために足をすすぐ水桶を用意した。足の汚れを落とし、土間から板張りの表座敷に上がった。供の者もそれになつた。

娘はその間に、火をおこし湯を沸かし、かいがいしく夕餉の支度を始めた。

周は供の者に、

「太湖に臨賀という街はあつたか」

と尋ねると、二人とも知らないと言つた。

「確か交州に臨賀があるが、ここからは四、五日はかかる。この先に同じような名の場所があるのだろうか」

周はそう思つて、別段気にも留めなかつた。

夕餉の準備もでき、娘は三人の前に膳を並べた。

「お口にあうかどうか。恥ずかしいばかりの田舎料理でございます」

と言つて夕餉を勧めた。

「弟御が帰らぬのに申し訳ござらぬが、お言葉に甘えていただきませう」

猪肉の羹あつものに、山菜、粟の一碗に吸物が添えてあった。周たちは、河の渡しを探すのに時間を取られ、昼餉を食べそこねていた。口に入れるものは、ただ水ばかりであつたのでひどく腹が減つていた。そのせいもあつてか、驚くほどに美味なのである。

「実に旨い」

と周がほめた。

「都のご馳走とはほど遠いものでございます」

娘は謙遜してそう言うが、周は今までにこのような美味なものを食したことがない気がした。

「本当に美味しゅうございます」

「このような料理をいただくのは初めてでございます」

と、供の者も口をそろえて褒めるのであつた。

食事が済むと、旅の疲れか周はうとうととした。

灯した蠟燭の炎がぼんやりと曖昧になつた。体も宙に浮いたように力が抜けていった。その時、外から子どもものの声で、

「阿香」

と呼ぶ声が聞こえた。その声で周は我に返つた。阿香とは娘の名のようであつた。

「領主様の御用だ。雷車を推せという仰だよ」

と言う。

「わかりました。今に行きます。お客様にお断りするので、お前は先に行つておいで」

外にいろのは娘の弟のようであつた。

「折角お越しいただきましたのに、急用が出来ましたのでしばらく失礼いたします」

「領主殿の仰せなら仕方ござらぬ。しかし、夜分の外出は女子一人では心細かろう。夕餉も済みましたので、供の者を一人お付けいたしましょう」

「いえいえ、それには及びません。ここらのことは目をつぶつてもわかつております。どうぞごゆるりとなさつてくださいまし」

阿香はそう言うのと外に出て行つた。月のない暗い晩であつた。

周たちは、阿香と弟は直に戻るだろうと思つて待つた。しかし何時になつても一向に戻る気配がなかつた。

その内に、遠くの方で雷が鳴り出した。その響きがだんだんとこちらに近づいてきたかと思うと、あつと言ふ間にひどい雷雨となつた。軒にあたる雨が滝のように流れた。風が吹き出して戸口を揺らした。それが次第に強さを増して、家全体が揺れるようであつた。

時々どこからともなく雨が舞い込んできた。戸口からも豪雨がしみ出していた。春だというのに、吹き込む風は真冬のように冷たかった。これはただ事ではないと、三人は肝を潰した。

「こんな天気で娘はだいじょうぶだろうか、弟も無事であろうか」

と周がつぶやいたが、二人の供は返事をする事もできなかった。雷は耳を劈くばかりであった。閃光が真昼のように外を照らした。三人は身を寄せ合って震えていた。

その夜は誰も一睡もできなかった。

明け方になると、雨は急にやんだ。どうやら出かけることができそうであった。しばらく待っても阿香と弟は戻ってこなかった。一言礼を言いたかったが、遅れを取り戻さなければならぬ旅なので、三人は家を後にした。

無錫の用事も無事に済み、帰路に付いた。往路で世話になった阿香に礼を済まさずに出てしまったので、土産に無錫で櫛を買った。

ここらあたりとおぼしき峠に辿り着いた。しかし、

世話になった家はどこにも見当たらない。一面が野原で草がぼうぼうに生えている。永年人が住んでいた様子がないのである。

供の者に四方を探させた。しかし、やはりそれらしい家を見つけないでできなかった。

「我らは迷ったのでしょうか」

礼も言わずに義興に戻るのどこか後ろめたい気がしたが、周は諦めた。馬を繋いだ木に向かって歩くと、草を食んでいる先に塚があるのが見えた。近づいてその墓誌を見ると、何と「阿香」という文字が刻まれていたのである。三人は無言で顔を見合わせた。義興に戻っても、誰にもこの話はしなかった。

時は過ぎ、周は一段一段と栄進を重ねていた。

升平元年のことである。周は交州臨賀の太守に任命された。

\*参考『捜神後記』「雷車」